

はじめに

二〇一六年は高麗郡が建郡されて一三〇〇年を迎えた記念の年で、日高市では官民を挙げて様々な記念事業が実施された。高麗郡建郡の歴史的意義を追究するために、二〇一三年に「高麗浪漫学会」が設立された。会では二〇一三年の高麗郡建郡歴史シンポジウムをはじめとして、高麗郡公開歴史講座を定期的に開催してきた。二〇一七年に、国内だけでなく朝鮮半島の研究者とも連携をさらに強化し渡来文化の研究領域を広めることを念頭に、「日本高麗浪漫学会」と名称を変更した。二〇一八年度からは、優れた渡来文化研究とその啓発と普及に大きく寄与した業績に対して「日本高麗浪漫学会 高麗澄雄記念 渡来文化大賞」の受賞が開始された。

高麗郡建郡歴史シンポジウムでは、古代高麗・入間郡の発掘調査の成果をもとに、集落の変遷や動態、高麗郡の古代寺院、各遺跡からの出土遺物から高麗郡の開発、高麗郡の郡家など、高麗郡建郡の実態を追究してきた。また、百済郡、新羅郡、渤海国を主題に据えて、渡来人の動向、高麗郡との関係性などを研究してきた。高麗郡公開歴史講座では東アジアとの関係を視野に入れ、「東アジアとの交流」「移民・帰化・渡来人」「広開土王碑」「古墳の壁画」「白村江の戦い」など多義にわたるテーマで講演会が開催された。これらの活動は日本高麗浪漫学会の目的である、高麗郡建郡の歴史的意義を追究することを実践してきたといえる。

高麗郡建郡歴史シンポジウムと高麗郡公開歴史講座などの成果を基礎として、二〇一八年に古代渡来文化研究シリーズの第一巻『古代高麗郡の建郡と東アジア』を刊行した。その後、「百済郡と高麗郡の成立と渡来系移民」、「新羅

人と高麗人」、「古代渤海国と日本」をテーマに据え、第四巻までシリーズの刊行が続いた。古代渡来文化研究シリーズの特徴のひとつは、一冊の研究書に文献史学と考古学の視点からの論考が共載されてきたことである。これは本会の研究員が、文献史学、考古学の研究者で構成され、共同で活動してきたことが大きな要因である。

二〇二三年は日本高麗浪漫学会設立十周年にあたり、本会における十年の研究成果を総括することを目的に、文献史学と考古学の研究員が登壇して二回のシンポジウムを開催した。一回目は文献史学から「高句麗から渡来した人々」を、二回目は考古学から「高麗郡建郡の実態」をテーマとした。

本書は二回のシンポジウムと高麗郡公開歴史講座で発表された講演内容をベースに、第一部「韓半島と東国の渡来人」、第二部「渡来系移民の動向」を設定し、対象とするフィールドは古代高麗郡・武蔵国から東アジアと広範囲にわたった論考を収録した。高麗郡・高麗系渡来人研究の現在地と、韓半島との具体的な関係性が多角的に論じられている。今後の高麗郡建郡に関する研究の新たな方向性を指し示すことができれば幸いである。

日本高麗浪漫学会 研究員

加藤恭朗